

女性たちの仕事とライフストーリー

——聞き取り資料の編集と考察——

小 松 秀 雄
阿 古 真 理*

はじめに

女性や性・ジェンダーに対する研究者の関心は近年、かなり高くなってきている。いろいろな理由が考えられるが、一つには若手を中心に女性の研究者が著しく増加し、少なからず女性である自分自身に対する自己言及的関心から研究しているように思われる。ただ、テーマも方法論も多彩であり、また提示される仮説や見解もまちまちである。そのような研究動向を考慮し、最初に本稿のテーマと方法論的立場に関して、執筆に至る経過を含め説明しておきたい。

共同執筆者の小松は、文化的再生産論やライフストーリーの方法論などの立場から、大学のゼミの時間などにおいて関連するテキストの講読を続け、毎年「女性・ジェンダー」をテーマとする卒業論文の研究も指導してきた。他方、もう一人の共同執筆者の阿古真理は神戸女学院大学総合文化学科を卒業後、ライターの仕事をしていたが、この春（1998年4月）から同年代の女性たちに対してインタビューを試みている。主に仕事をテーマに自由に語ってもらう形で長時間テープに録音しながら聞き取りし、いずれ本の形にまとめるつもりでテープ起こしをして、かなりの量の記録が作成された。

小松は、阿古から多量の聞き取り資料を収集していることを聞き、本学の

*神戸女学院大学総合文化学科卒業、現在、フリーライター

『女性学評論』の趣旨に合う資料と判断して、阿古との職業の違いに配慮しつつ文化的再生産論、組織の経済学、ライフヒストリーの方法論などの視点から考察してみるようになった。インタビューの記録からテープ起こした生の資料を直接使うことは、紙幅の制約があるため差し控え、そのかわりに本稿の研究方針に合うように阿古が編集した。その資料に対して、小松が前述の視点から論文の全体の構成を整えながら検討を加えた¹⁾。

1. 女性と社会

インタビューは現在30才前後の女性たちを対象にし、仕事を中心テーマにして家族や生活に関しても聞き取りしているので、最初にインタビューのテーマに関連する範囲で、現代の女性が置かれた社会的状況に関して近現代の社会史の視点からまとめておく。

【戦前・戦中・終戦直後を生きた女性たち】

社会学では1980年代から、ライフヒストリーとライフコースの理論が「女性・ジェンダー」を研究する有力な方法として注目されるようになってきた。1990年代初めに刊行された『女たちのライフストーリー』（桜井厚他、谷沢書房）などを参考にしながら、十九世紀末から二十世紀前半までの「日本のふつうの女性たちの人生」についてアウトラインを描いてみよう。

二十世紀が終わる現在の時点に立って見ると、戦前・戦中・終戦直後の多くの女性たちにとって、経済的な窮乏が半ば慢性的な状態になっており、また社会制度上は旧民法、家制度の慣行、および「国家の戦争を支える女性」という規範が自由な選択と行動を妨げていた。高等教育と中等教育はもちろんのこと、初等教育さえ満足に受けないうまま社会に出て、周囲の重い社会的束縛の中で働き、結婚し、子供を育て、婚家の両親と夫たちに従いながら懸命に生きてきた。考える余裕もなく、働きづめの人生を送ってきた女性が多かった。彼女たちの心のうちはどうだったのか、幸せだと感じたことはどれだけあったのだろうか、自分の意思で選択したことはどれだけあったのだろうか。それらの問

題に対して、『女たちのライフストーリー』は完全なものではないが、何らかの回答を与えてくれそうである。名古屋地区のふつうの女性がライフストーリーの語り手になっており、彼女たちの語りからは、それぞれ自分なりに精一杯工夫しながら、あるいは抵抗しながら人生を歩んできたことが伺える。時には自分の親の言いつけに従わずに好きな人と結婚しようとしたり、やりたい仕事を探したり、夫が戦死したために子供を抱えて再婚せずに一家の大黒柱として頑張ったりした。特別に楽しいとか幸せだと感じたことは、余りなかったというが、生きることはそういうもんだと思っていたようである。

現在の一般的な生活感覚と身体感覚からすれば、ライフストーリーの語り手たちは不自由な暮らしまたは不幸せな生活の連続であり、恵まれた一生だとは言えないかもしれない。ただ、ふつうの女性として自分なりに懸命に生き、歴史や社会の表舞台に華々しく登場することはなかったにせよ、日本の歴史を支えてきたことだけは確かである。優雅な暮らしを送った貴婦人や表舞台で活躍した女性よりも劣った存在とは思わない、むしろふつうの女性たちこそが歴史の主役だったと考えるべきかもしれない。真摯に生きたふつうの女性の語りには、人間の尊厳と人生の重みを見い出すことができる。

【戦後のサラリーマン家庭と専業主婦たち】

第二次大戦後、民主主義の思想＝制度とアメリカ的ライフスタイルが社会に広がるにつれ、女性を取り巻いていた重苦しい束縛の多くが取り除かれていく。すなわち、新しい憲法の制定と民法の改正をはじめとする法的制度の改革が進み、また産業構造の転換と都市化に伴い家制度の慣行が社会的基盤を失い、次第に消えていく。このようにして、女性の自由な選択と行動のための制度が少しずつ整備されるようになるが、戦後の日本の高度経済成長によって社会全体が半ば慢性的な困窮状態から抜け出した時に、専業主婦という新しい女性の選択肢が現れてくる。

昔と変わらず農業が産業の主体だった1950年代には、結婚後も家事と育児だけでなく女性が農業に従事することは当たり前のことであった。それに対し、

1960年代以降の高度経済成長、高学歴化、産業構造の転換、都市化の拡大というドラスティックな社会変動は、都市部に大量のサラリーマン家庭を生み出した。多くの女性は都市部の企業や役所に就職し、そこで恋愛結婚して親とは別の家庭を作るようになった。そしてニュータウンに代表されるように、結婚退職してからは職場から分離されたマイホームで、サラリーマンの夫と未婚の数少ない子供とともに暮らすようになった。1970年代まではサラリーマン家庭の専業主婦が増加する。「男は外で働き、女は家庭で家事と育児に専念する」という性別役割分業の言説が、歴史上最も幅広く社会全体に定着した時代と考えられる。1970年代後半からは子育てから解放された既婚者の職場復帰が少しずつ進み、また子育てをしながら企業や役所で仕事を続ける女性も増えて、統計的に見ても純粋な専業主婦は減少する。一般的には軽々しく論じられないが、ある程度時間と家計のゆとりが生まれた時に（もちろん、教育や消費財や住宅の費用が増えたという反対の要因も軽視できないが）、一度家庭に入った多くの女性たちが、再び社会に出て働いてみようという気持ちになったように推測される。それと呼応するかのように、性別役割分業の言説も次第に退潮するようになるが、そこにフェミニズムの運動と言説がどのような影響を及ぼしたのかは、紙幅の都合上、ここでは問わないことにしたい。

この時代のふつうの女性たちは自分のライフストーリーをどのように語るのだろうか。自分の意思で進路を選択し、思い通りの人生を歩んできたと言えるのだろうか、楽しい生活あるいは幸せな生活を送ってきたと言えるのだろうか。詳細なライフヒストリーの資料を調べたわけではないので、はっきりした答えは出せないが、少なくとも戦前・戦中・終戦直後を生きた女性に比べ、多くの女性は自分の意思で選択したと語るだろう。ただ、選択の結果、思い通りの生活を送れたかどうかは個人差があり、語り口調と内容は千差万別になるだろう。

【現代の女性と選択肢の多様化】

戦後の一連の制度改革と言説の革新、さらに1960年代以降の大量のサラリーマン家庭と専業主婦たち、主婦の職場復帰、フェミニズムの運動と言説などが

押し進めた女性の社会史は、二十世紀が終わろうとしている現在、混迷を深めているように見える。性別役割分業の言説に基づくマイホームと専業主婦の理想像もいまだに根強いものがあり、他方ではキャリアウーマンやシングルマザーも確実に増加しつつある。家族やジェンダーに関する社会学が多彩な仮説を提示しており、詳細な内容は省略するがそれらを考慮すると、世紀末の不況に悩まされているとはいえ、国際的に見て日本の社会全体が経済的に豊かになっているから、日本の女性の前には、かなり多様な選択肢がそろっているように想定される。ただ、ようやく「人間としての女性の自由」が社会的に実現されるための基盤が整っているかに思われる一方で、一人一人の女性が自律できるようになるためには、数多くの課題が残されている。法的制度のレベルとは異なり、職場の慣行と雰囲気、男性の意識と行動、マイホーム家族の慣行、女性自身の意識と行動などを考える限り、まだまだかなりの時間をかけて「実質的基盤整備」のために回り道をしなければならないようである。

本稿で取り上げた事例は、昔とは異質な混迷状態の中にいる現代の女性が、仕事と生活を中心に語ったライフストーリーを編集したものである。周囲のいろいろな束縛に取り囲まれながら、また支援と励ましを受けながら、それぞれ自分なりに生活設計を考え、迷いながら選択を積み重ね歩んできた人生を語っている。恐らく、本人自身も人生の結論を出す段階ではないと考えており、今後の方向を見定めようとしている。インタビューを实践した阿古が、次の2において「現代社会と女性との微妙な関連」を描き出す形でまとめた。

2. 90年代に生きる女性たちの仕事観—6人の女性たちのライフストーリー—

現代社会において、女性たちが「仕事」をどう捉えているかを探るために聞き取りを実施した。今回の論文では、6人の女性たちを選び、主に仕事観を中心にまとめた。インタビュー（聞き取り）の中では、各人の育った家庭環境や現在の家庭での家事労働の負担について、また家庭や職場の外での多彩な活動と

仕事との関連などについても質問を行っている。紙幅の制約があるため、本稿ではその中で主に仕事に関連するポイントだけを取り上げたので、女性たちの実像を伝えるには不十分な点多々あるけれども、彼女たちの考え方や悩みを通して企業や社会の問題を見出し、これからの社会に向けて考える一助になれば幸いである。なお、今回選んだ6人以外にも1998年12月時点で8人にインタビューを実施しており、その中には以下に記した年代の②での条件が異なる、幼児を子育て中の女性も含まれている。

〔インタビュー（聞き取り）の実施方法について〕

- ・時期：1998年4月～11月
- ・場所：喫茶店等の飲食店またはインタビュー対象者の自宅
- ・時間：約5時間前後

〔インタビュー（聞き取り）対象者の特性〕

- ・性別：女性
理由について、①働き手として期待される人物像が男性ほど明確ではない。②一方で、仕事をするという面において、弱者の立場に置かれる確率が高い。その分、社会の抱える問題点を明確にしやすい。
- ・年代：1964年度～1969年度生まれ
理由について、①男女雇用機会均等法施行後からバブル崩壊以前に社会人になっているので、スタート時点では建前としては男性と同等に働くチャンスを与えられた。②子供がまだいないこと、親が比較的まだ若いことで、子育てや介護問題が発生していない。また地域との関わりも少ないので、周囲の人間との軋轢がその上の年代ほど多様化していないと考えられること。
- ・地域：関西、特に京阪神地区で多くの時間を過ごし、現在、関西在住であること
理由について、①社会人になっても親が近くにいるか同居している確率が高い。②都市または都市近郊に住んでいるので、職業の選択肢が広い。③風土によって決定される地域の価値観の違いが小さい。

(1)【事例1】 A・Hさん 30歳 大阪府豊中市在住 家族構成(夫、本人)
コンピュータ会社 営業事務(正社員)

A・Hさんは、4年制大学経済学部を卒業した後、現在勤務する外資系のコンピュータ会社に一般事務社員として入社した。ちょうど企業が女性の活用に積極的な時期でもあり、当初は専門職を希望していた。しかし、母親から「結婚しても続けられるような仕事は、ある程度楽な仕事じゃないとあかんよ。つまらんかもしれないけれど」と水をさされた。最初は反発したが、確かに「やり甲斐のある仕事である専門職を選んだ場合に、結婚して子供ができてってなったときに、自分の中で道を変えないといかんときが来るんちゃうかと思ったから」現在の会社での一般職を選んだ。もちろん、結婚しても家事を夫婦で分担して専門職で働く女性もいる。でも、自分は親の考えが古いせいか、家事は全て主婦がすべきものと考えていたし、子供には自分が手をかけて育てたいという思いもあった。

入社前から大学の就職資料室や周囲の友人から得た情報通り、そこは働きやすい会社だった。アメリカの会社だからなのか、同じ職種内での待遇面で男女差はほとんどなく、上司を役職名でなく「さん」づけで呼べるなど上下の風通しもよい。事務とはいえ、与えられた仕事をこなすだけでなく「自分でどんどん仕事を見つけてやっていきなさい」と上司から言ってもらえる。資料のファイリングなど、仕事を自分がよいと思うやり方で進めることができる。他の企業に就職した友人が、事務の女性同士のいざこざなどの愚痴をしきりにこぼすのに対し、Hさんは女性同士のわだかまりにも無縁だった。ただ、そのことに関しては、1つのチームに事務職が1人入るといふシステムのせいではないかと彼女は分析する。

入社3年目になると、一通りの仕事を覚えて周囲が見えるようになる。周りは事務とはいえ、英語がペラペラで、難しいコンピュータシステムを自在に使いこなす先輩ばかり。英語力にも自信がなく、システムも悪戦苦闘して使っていた彼女には、当時後輩がいなかったことも手伝って、自分だけが何もできな

いように思えた。悩んでいた折、営業の先輩から「頭がよいつていう意味では先輩には敵わないかもしれない。でも、君達がしている事務職は、そういう頭を使う仕事だけじゃないでしょ。いかに営業が働きやすい雰囲気してくれるかが大事や」と言われた。例えば、自分は出張の新幹線のチケットやホテルを手配する際、列車の時刻表やホテルの地図のコピーを添えているが、その気配りが喜ばれていたということを知った。それからは、営業マンに役立つ情報を常に把握しておくように心がけている。会社のルール変更を常にキャッチし、営業マンが覚えきれない細かい事務手続きを把握しておく。最近では、「Hさんに聞いたら、社内の規定は分かるよ」と言ってもらえるようになったという。自分の仕事はサポートであり、営業マンの役に立っているということが、ひとつのやり甲斐であると思っている。

しかし、この仕事を今後もずっと続けていくつもりはない。Hさんは現在結婚3年目。30歳という自分の年も考えると、そろそろ子供を、という話題が夫婦の間でものぼる。子供ができたなら退職する可能性は高いと彼女は言う。確かに続けられるからと選んだ事務職ではある。残業が少ないため、結婚後も不十分ながら家事とも両立はできている。今の会社なら、結婚や出産での女性の肩たたきは皆無であり、育児で何年か休職しても復帰は十分に可能だろう。恵まれていると思う。それでも事務は所詮サポートであるという考えはぬぐい去れない。「未練を残すほどの仕事ではない」と彼女は言い切る。もし、子育てのために一度職場を離れたら、事務職としては復職しないだろう。営業事務は、若いときにする仕事だと思う。最近、新入社員の女性が入ってからの職場の雰囲気から考えると、男性は本音を言えば若い女の子がよく、事務職の女性は「華を添える」部分もあるのではないかという気がする。「常に稼ぐという観念は必要だと思うけど、仕事って自分のやりたいこととか、将来の自分に向かってやっていくこと。将来的にこういう人間になりたいという目標を置いて、それに近づいていくことなんじゃないかと思う」。

長く続けられる仕事はやはり専門職だと考えている。例えば育児で会社を辞

めても、「何もなかったら社会復帰も難しいし、パートのおばちゃんぐらいにしかなられへん」。以前、そういう意味もあって簿記3級まで取ったが、結婚準備などの慌ただしさもあって、2級の勉強は中断したままだ。少し前までは、保母の資格を取っておいて、企業内保育所を持つ会社ができた時にそこで働けたらと思っていた。今はインテリアコーディネーターにも惹かれる。どれもまだ本気には至っていないが、興味を持ったものはとりあえず勉強して、会社を辞めるまでに打ち込めるものを見つけない。「人間一生勉強じゃないけど、そういう気持ちは持ってなあかんと思う」。

子供は3歳までは自分の手で育てたいから、会社は辞める。そして子供が幼稚園に行くなどして手を離れたら、少しずつでも何か仕事をしたい。どうしても再就職が難しければ、それはそれで仕方がないからあきらめる。ただ、専業主婦になることで社会との接点がなくなるのは正直言って不安がある。今は、毎日会社に行くだけでも、政治や社会情勢、業界の話までさまざまな情報が入ってくるが、家にいると、積極的に勉強しないと社会から取り残される。そう考えると、子供を預けて働くというのもひとつの方法だろう。また、保育園に行くことで、子供が両親以外の大人や子供たちに接することも大事ではないか。現在、どうするべきかは思案中である。

(2)【事例2】 N・Iさん 34歳 兵庫県神戸市在住 家族構成(夫、本人)
食品メーカー 人事部(正社員)

小学校4年生の担任の先生に憧れ、自分も「学校の先生になろう」と決めていたN・Iさんが一般企業に就職することに決めたのは、大学の4回生になってからだった。生徒を感動させるような先生になりたいと入った教育大には、自分と同じように教職に夢を持つ学生は少ないように見えた。周りを見渡してみると、画一的で従順な人間ばかりで、制服の長さまで細かく決めるような中学や高校の校則に、疑問を抱くふうもない。違和感は年を追うごとに大きくなった。教育実習で思うように生徒を指導できなかったことも加わって、今ま

で知らなかった学校の外の社会を見てみたいと思い、一般企業に目を向ける。ところが就職活動を始めると、周囲の大半の学生は教職志望であるため、企業についての情報はほとんど入ってこない。結局、父親の紹介で現在の大手食品メーカーに内定を貰った。

「とりあえず、何でもやってみて『一般の人がやっていることを経験してみよう』って無茶無茶軽い気持ちやってん」。社会勉強として3年ぐらい企業で働いて、その後のことはまた考えればいい、と何も情報を持たないまま入った会社だった。何事も勉強と覚悟していたつもりだったが、初仕事として「布巾縫ってくれ」と言われたのはショックだった。一方で、上司からは「あなたは事務員じゃなくてスタッフだから、そのつもりで」と言われる。ある意味でこの体験は、この会社の女性社員に対する体質を表現する象徴的な出来事だったと、今振り返っても思う。

総合職採用で入ったIさんの肩書きは現在主任であるが、昇進した時期は同期の男性より2〜3年遅い。同僚の男性は、社外の研修会にも行かせてもらっているのに、自分には声が掛からない。上司にそのことを訴えても聞き流される。同僚は企画の仕事を任されているが、自分には事務的な仕事しか回ってこない。かといって、彼のように上司と頻繁にゴルフに行ったり飲みに行くような関係は作れない。自分の仕事の進め方がまずいのではないかと思うこともある。また「論理的に組み立てていって企画するっていうのが、私は苦手なんちゃうかな」という気もする。生産部門を除けば社員の大半が営業の男性で、女性の比率は1割に満たない。しかもほとんどは短大卒の一般職である。もちろん総合職の先輩はいない。部内の他の女性も20代前半と若い。社内に比較できる対象がいないので、うまくいかないのは自分の実力がないせいなのか、女性であるからなのかははっきりしない。

会社の中だけでは視野が狭くなるからと、雑誌などで見つけた仕事を題材にしたセミナーなどには積極的に参加するようにしている。そういう場所に行くと、他の企業で働く同年代の女性に出会える。会社の体質を変えようと頑張る

人。新規事業を興す部門で企画を担当する人。子供を育てながらフルタイムで働く人。そんな人に会うと「考え方もちょっと前向きになれるし、自分でやっていることも、意味のないことばかりじゃないんやな」と思え、もう一度やる気が出てくる。

最初は研修、次は採用、現在は福利厚生と、約3年ごとに担当が替わりながらもずっと人事畑を歩いてきた。3年目からは社内報を受け持つことになり、現在は16ページの月刊誌を1人で作っている。人事の仕事しか知らないことで、「社内的な立場が結構弱い」のではないかという心配はある。企業の中にいる限りは「会社の他の人にも認められて、信頼されて、一目置かれない。それなりに出世もできていけば、自分も満たされると思う」。そのためには、人事以外の仕事も知っておくことが必要である。少なくとも商品売る現場に立つ営業職は、体験しておいたほうがいいだろう。しかし、古い体質が色濃く残る業界でもあり、朝は8時から、夜はへたをすると日付が変わるまでかかる営業の仕事をする自信は持てない。女性であれば、取引先の人からセクハラまがいのことを要求されることもある。営業に配属された後輩の女性たちが、何人も辞めていくのも目にしてきた。

実力はつけたいが、社内での異動が難しいとなると、目が向くのは社外だ。今までに何度か転職を考え、面接を受けたこともある。出版社、保育園の園長、マーケティング会社。しかし、具体的な退職日についての話になると、声のトーンが自然と落ちてくるのが分かる。給料や休日日数など、待遇が今の会社より劣るという点でも二の足を踏んでしまう。

今の会社も悪いところばかりではない。「儲けられたらそれでええ」という中小企業的な泥臭い側面が会社の活力の源にもなっており、長引く不況の中でもリストラの声は聞かない。個人に任される仕事が大いことがヒット商品にもつながる。時代の変化への対応も速い。社内報の取材でやる気のある社員に出会うと、会社も捨てたものじゃないと思う。しかし、自分自身は「今のままやったら沈んじゃう」という危機感がある。「人事部のままやったら、かわりばえも

しないし。仕事の内容も変わらなかったら、自分の成長もないし。そのまま会社でも使われない人間になって、いざ他に行こうと思っても使われない人間になってしまったら、もうどうしようもない。すがりついていくしかないやん。

Iさんは、数年前から社会保険労務士の資格を取るための勉強を始めた。会社に残るとしても、年金や社会保険に詳しくれば部内でもPRできるし、転職する場合も資格があれば強い。たとえ資格を取れなくても、学んだ知識を基に個人対象に年金相談のアドバイザーをするのもいい。今後社会の高齢化が進む中でニーズは確実に増えるはず、と彼女は読む。

仕事をするのは当たり前だと思っている。結婚する時も、仕事を辞めることは全く考えなかった。もし子供ができて、基本的にはベビーシッターをつけて「収入より支出が増えても、仕事は続けようと思えばできるんちゃうかな」と考えている。本をたくさん読んできたせいだろうか。子供の頃から「男に頼って生きていく生き方は嫌」だと思っていたので、専業主婦の母を見てはがゆく思うことも多かった。両親は仲良かったが、子供心に自分は離婚しても独りで生きていけるようになりたいと思っていた。年をとったら、子供に何か教えられるような仕事をしたい。誰かに何かを教えてあげられるおばあちゃんになれたらカッコいいだろうな、と今なんとなく憧れている。

(3)【事例3】 N・Nさん 30歳 兵庫県西宮市在住 家族構成(父、母、本人) 化学メーカー 営業事務(派遣社員)

N・Nさんが派遣会社に登録して、営業事務の仕事をしたのはちょうど1年前である。最初に勤めたガスメーカーは、ひっきりなしに鳴る電話の対応に追われる忙しい会社だった。「お客さんから直接苦情をごちゃごちゃ言われたりしたから、やっと営業の難しさっていうか厳しさを知ったかなあ」。社内の研修担当の仕事しか知らなかった彼女にとって、そこでの体験は初めて直面した社会の荒波だったといえる。今まで、土日は家でごろごろしている父親を「だらしない」と思っていたが、目の回るような仕事の忙しさを実感し、改めて「お

父さんは偉いなあ」と思ったという。

Nさんは中学からエスカレーター式の4年制女子大の英文科を卒業、父親の紹介で入った大手鉄鋼メーカーで4年間勤めた後、家庭の事情で退職した。縁故で就職することに違和感はなかった。彼女がいた女子大では当たり前のことだったし、特別「これ」という志望があれば自分でその仕事を見つけなければいけないけど、なければ「どこに行ってもあんまり変わらない気がするのね。それだったら、いいところっていうか、環境が整っていて。安全って言ったら悪いけど」。「とりあえず、親が用意してくれたレールに乗っかっていくのもいいかなあって思って」就職する。職場での人間関係は良かった。研修先で会う工場の人たちにもかわいがられた。それなりにつらいこともあったが、今から思えば先輩たちに守られて、自分は「たまに小波に当たる程度」だったと思う。

派遣先には、同じ仕事を担当する女性社員が4人いた。もう1人の派遣社員と彼女を含めて6人で関西を中心とした全国の販売エリアを分けて、商品であるガスの注文を受け、手配する。40人いるフロアにかかってくる電話を受けるのもすべてNさんたち女性の仕事だった。フロアの端にいる部長あてに電話がかかってくるけど、本人が席にいるかどうかも見えず呼んでも聞こえない。仕方がないから、席まで走って行って電話を取り次ぐ。

商品のガスはオーダー次第で何種類も組み合わせで合成ができる。どのガスとどのガスが合成可能で、どのガスが使えないか。当然、入りたての彼女は把握していないから、その都度調べる。価格設定も複雑である。得意先によって価格が違うから、注文のたびに分厚い単価表を繰って調べ、機械に入力する。最初はトイレに行く暇すらない忙しさで、「ほんとに死ぬかと思った。家に帰ってきて『口きく気力もないってこのことか』っていうの？友だちに電話するのもめんどくさいし、かかってくるもうれしいんだけど、さっさと切ってご飯食べてお風呂入って寝たいって感じだったからね。もう土日は死んだように寝てた」。常に時間との戦いを強いられるため、職場のムードも殺気だっている。全く初めての仕事で勝手が分からず、データの入力方法も聞かないと分からな

い。彼女が質問をすると、社員の女性は「前も言ったと思うんだけどね」と棘のある言葉で説明する。

そんな環境もあって、派遣元に、6か月間の契約期間終了後は勤務先を変えてもらうよう頼んだ。次の勤め先は大手の化学メーカーである。仕事の内容は、やはり営業事務だった。しかし今度の会社はなごやかな雰囲気、上司や周囲の女性社員も親切で優しい。扱っているアクリルは、レディメイドの商品だけなので、注文に対して在庫の有無を確認すればよい。価格構成もシンプルで分かりやすい。コンピュータによるオンライン化も進んでいる。営業事務という職種に慣れてきたというのものもあるだろう。仕事はやりやすかった。ただ、今はデリバリーだけでなく請求書の金額照合まで受け持つ。回収条件が異なる得意先があるので、それに伴う計算の複雑さには閉口させられる。つい最近も、延滞になった手形の発行日について経理から問い合わせがあったばかりだ。

自分は働くことに向いていないのではないかと。電話で商品について説明を求められ、担当者がいないから分からないと答えても納得しない相手もいる。「なんで分からへんのや」と責められる。「気にしない人もいると思うけど、私はそういうのすごい弱から。言われるとシュンとなってしまっただけ。一種の逃げなんだけど、向いてないかと思って」。職場の人間関係が良いので、できるだけ続けて働きたいけれど、上司が異動になって雰囲気が変わっても働き続ける自信はない。前の会社での経験や、電話の対応も荒っぽい忙しそうな隣の部署の人たちを見ていると、「外で働くのはイキイキするかもしれないけど、その分、なんかギスギスしてくる部分もあるような気がして」不安になる。

同じ職場で2か月前に結婚した社員の女性が、銀行や郵便局に行くなどと席を外すことが多く、忙しい時を別にすれば定時にすぐ帰ってしまうのを見るにつけ、結婚と仕事の両立は難しいと思ってしまう。「少なくとも仕事してるときは、家庭を持っていようがいまいが、親だろうがなんだろうが、1人の会社員として責任があるっていうか、義務があると思う」。かといって、いざ結婚した時に自分はそれができるか。結婚は仕事に全力投球できない理由にはならない。

「結婚するから辞めるというのも、もったいないような気がする」が、割り切ることができないのなら、辞めたほうが会社にとってはいいのではないか。「本当は、家でんびりしているのが好き」と彼女は言う。

親を含め、親戚や友人にも専業主婦が多い。結婚したら仕事は辞めて子供を産んで育てていく。それが当たり前だと思って今まで来た。社会勉強として外で働くことは必要だとは思いますが、仕事を持つことに対する執着はない。主婦というのも、ひとつの仕事ではないか。「ご飯作って、掃除・洗濯してっていうのは、しょうもないことかもしれないけど、やっぱりそれをすることによって、家の中が保たれてくるわけでしょ。ハウスキーピングって確かに言う。まさしくっていう感じ。それはやっぱり仕事」。家庭というのは巣であるから、家族が健康でくつろげる環境を作ることも大事なことだと思う。確かに主婦の仕事に報酬は出ない。一般的な意味でいう仕事とは違うかもしれないけれど、「自分の中でこんだけのことをしたっていう、達成感というか満足感があったら、それはその人にとっては仕事だと思うから」と彼女は言う。

(4)【事例4】 I・Kさん 30歳 兵庫県神戸市在住 家族構成(夫、本人)
主婦・英会話講師

I・Kさんは学生時代に、喫茶店で働くうちに、「人と『ありがとう』とかそういう一言を交わすような職業がいいな」と思うようになり、ホテルを卒業後の就職先として選んだ。

彼女が通っていた4年制女子大は、関西では名の通った大学だった。英文科で、中学時代、父親の仕事の関係でロンドンに住んでいたという経歴があるので、就職活動で「英語ペラペラそうって履歴書」を出すと、会社の受けがよい。関西では履歴書だけで判断されるのが気に入らなかったもので、東京の会社も受験していた。また「関西のホテルよりも、絶対東京のホテルのほうが規模も大きいし、外国人の割合も多いし。一流の仕事するんやったら、絶対向こうで勉強したほうがいい」という考えもあった。結局、面接官の印象が良かった東京

のホテルに決める。そこはアメリカのホテルチェーンに私鉄が出資した会社だった。女性でも夜勤があるなど、男女の待遇差がなさそうな点も気に入った。

Kさんはフロントに配属された。勤務時間が日によって異なるので生活は不規則で、仕事もきつかったがお客さんと接するのは楽しく、苦にならなかった。最初に応対した客がアメリカ人で「昔の友人が日本で劇作家になっている。彼が作った劇が今、どこどこで行われているから、彼に会いたい」と頼まれた。彼女は劇場に問い合わせるなどしてその人を探したが、結局日本にはいないことが分かった。その客は、彼女の誠意に感動してわざわざお礼の手紙をくれたが、「1人の人に関わると、他の人のことができなくなるからって怒る人もいるわけよ。でも『怒られるかな』って思いながらもやったことで褒められたから嬉しくて。その手紙、コピーしてずっと持ってたよ」。

自分ではできるだけ、1人1人の客の要望に応えたい。しかし、会社は1人でも多くの客を捌くことを要求する。また「その人のことはできても、全員やれないってことは断らなきゃいけない」という事情もある。結局、「1人に時間をかけないでどんどんどんどん、早く早くって状態になっちゃう。そういう人が『仕事が速い人』ってことで、結構認められちゃったりするから。1人に時間をかけてると『仕事が遅い』とか言われちゃったり」ということが起こる。そのうち、仲の良い先輩とコンシェルジュをやりたいという話で意気投合し、同じ意志を持つ他の先輩と合わせて4人でコンシェルジュの部署を作ろうと会社に働きかけた。コンシェルジュは、宿泊客全員に対して仕事のサポートや観光案内を専門的に受け持つ。まさに自分がやりたいと思っていた業務である。入社5年目の年、それに相当する部署ができ、先輩の1人はそこに配属された。彼女は「必ずそこへ入れるから」という先輩の言葉を信じて待っていた。ところが、部内のコンセンサスがうまく取れないことや、成果がすぐに現れないことで1年でその部署は潰されてしまう。

部長以上は親会社の私鉄から来た人ばかりだから、ホテルの仕事は分かっているのだと彼女は言う。接客の現場を知らない上層部や人事・総務など内勤

の人たちは、彼女たちが要求するものの必要性を認識できない。また、不況で高級ホテルを利用する人が減っている中で、会社は売上を確保したい。いきおい、すぐに利益があがらないものに会社はお金を出したがるらないのだ。「コンシェルジュっていうのは、その場で見えない。売上は見えないんだけど、絶対に貢献はしているんだけど。見えないからって結構予算が削られるところもあった」とKさんは分析する。

その頃、彼女に海外研修の話が持ち上がった。行く先はヨハネスブルクにある同じチェーンに所属するホテルで、半年間の予定だという。海外研修は、昇進するためには必要なステップである。大喜びで帰って結婚して1年になる夫に報告した。ところが普段は自分の好きなようにさせてくれる夫が、いつになく強硬に反対する。「半年離れてるのも自信ないし」と言われると、夫の気持ちを無視してまで転勤する気にはなれなかった。後で、夫は、危ないところに無理やり行かされると思って反対していたと知ったが遅かった。

当時、Kさんは平社員ではあったが、フロント内のあるセクションのチーフの役割を果たしていた。しかし、平社員の身分では権限が弱い。何か決めようとするたびに、他のセクションの上司に許可を求めなければいけない。その業務に詳しくない上司の判断は、見当外れではがゆい思いをすることが多かった。不満がたまっていく中で、コンシェルジュの夢が消え、研修も駄目になる。完全に目標を失ってしまい、これ以上会社にも仕方がないと退職を決意した。6年あまりの不規則な生活や、結婚するまでの5年間の寮生活で食事がよくなかったこともあって、体調も悪かった。

その年の暮れ、夫の実家の事情で神戸に戻った。生活が落ちつくと、フランチャイズで小学生対象の英会話教室を始めた。子供は苦手だと思っていたが、やってみると案外楽しい。子供もなついてくれる。ただ、なかなか生徒は集まらないし、親会社にかなりマージンを取られるので収入は微々たるものだ。並行して、インターネットで見つけたホームページの修正や調査の仕事をしているが、まだ小遣い程度の収入にしかない。

ホテルで働いていた頃は、結婚後も夫と財布は別だった。「家賃は私はいくら振り込む、あなたはいくら振り込む。食費は買うほうが出してって決めてやって。そういうのが初めて。それ以外は全部、お互い別の財布やったわけやから。外に食べに行っても『奢るよ』って会話が結婚してからもあった」。だから、今、夫の収入で生活している自分に罪悪感を感じる。自分が仕事を辞めたことで家計が苦しくなったという事情もある。食費を減らすなど、自分は生活費を切り詰める努力をしているのに、夫は「スーツケースが欲しかったから」など、簡単にお金を使ってしまう。「だけど、向こうが働いたお給料なんだから、私が怒ることじゃないっていう気持ちも自分にあって。怒りたいのに怒れないっていうのにイライラしちゃう」。働くのは当たり前だと思っている。いずれは子供をとも考えている。そうするともっとお金は必要になるだろう。だから、子供ができて続けられるものを選びながら、今の仕事を少しずつでも増やしていきたいと考えている。

(5)【事例5】 T・Nさん 29歳 大阪府枚方市在住 家族構成(父、母、本人) フリーライター

T・Nさんは、子供の頃から文章を書く仕事をしたいと思っていた。しかし、書くために何をしたらいいか分からないので、とりあえず短大の国文科に入学した。「勉強して適当に遊んでれば何か見つかるかと思って。2年があっという間に過ぎて、結局まだ何も分からなくて」。OLになるつもりはなかったので、当面のところ無職でいようかと思っていたところ、大学の先生の知り合いである編集プロダクションの社長が、社員を募集しているという。その会社を紹介してもらって仕事を始めた。

最初、名刺に「ライター」と書いてあるのを見て驚いた。当時は、ライターというのは作家を指すと思っていたので、果して自分にできるのかと思ったのだという。そこは、通信教育を受ける高校生向けの大学案内のカタログを作っている会社だった。与えられた仕事は、高校生に向けた大学生のメッセージレ

ポートをコラムにまとめたり、各大学のパンフレットを基に、沿革や学科案内を記事にすることである。資料をまとめる作業は得意だったので、仕事は最初に思っていたほど難しくはなかった。しかし、旅行やショッピングが好きな彼女にはその仕事が堅苦しく思え、「もっと柔らかいものを書きたい」と、2年半でそこを辞める。社長には「うちは辞めても、書くことは絶対続けていったほうがいいよ。あなたは才能があるから」と言われた。物事をはっきり言う社長であっただけに、この言葉は嬉しかった。

しばらくして、「とりあえずお金がないからアルバイトをしよう」と思って就職情報誌を見ていると、以前、高校の先輩が働いていた編集プロダクションが、アルバイトを募集している広告を見つけた。そこは、30代～40代の女性向けの冊子も作っているという。「前の会社よりも、もうちょっと自分に近いことができるのかな」と思ったので、本音を言うとまだ遊んでいたかったが、これもチャンスだと思い、そこでアルバイトを始めた。

健康食品を扱う会社の女性向けのPR誌など、扱うジャンルは前より面白くなった。社員同士も仲が良く、精力的に働く先輩もいる。Nさんの仕事は、最初はコピー取りや使い走りなど雑用だったが、次第に編集も手伝うようになり、任される内容が社員並みになった。しかし社員が、企画ページのミーティングを楽しそうにしているのに、「私はアルバイトやし、その中には入れられへんしっているのがあって。すごい、なんか自分の中で肩身が狭かった」。社員の人たちは別に「アルバイトやからとか社員やからという見方はしてなかったと思うんですね。同等に扱ってくれてたと思うけど。それでも、時給で働いてる、その葛藤がすごくあって」。社長に要求して時給は上げてもらったものの、社員になれる気配はない。そのうち、会社の経営も傾いてきて、仕事の本ばかり読んでいることが多くなった。書く仕事は外注が多かったので、自分で「書きたい」という気持ちも高まってきていた。そんな頃、半年前にそこを退職した女性のMさんから「フリーになって一緒に仕事やらへん？」との声が掛かる。その人は、会社にいた当時から彼女の仕事ぶりを認めて、1つのPR誌をまるご

と任せてくれた人だった。フリーライターになっていた彼女についていく形で会社を辞める。ほどなくして、その会社はメンバーが解散したと聞いた。

やはり書く仕事は好きだ。アルバイトをしていた頃も、前の会社から学校案内の仕事を頼まれ、家でその原稿を書いていた。バイトは週4日で、6時に退社していたとはいえ、夜中まで学校案内の原稿を書く日が続く。その仕事が嫌で辞めた会社なのに、「やりはじめると、なんか楽しんでる自分がいて、『私、やっぱり（書くことが）好きなんだ』ってその時にすごい思った」。

フリーになってからは、Mさんを通してのブライダル情報誌の仕事が中心になった。最初は「雑誌に書ける自分がうれしかった」。自分の書いた記事が載るたびに、「ここ、私が書いてん」と親や友人に誌面を見せる。2年前にその雑誌からシンガポールの取材記事を依頼された。「親の会社とかにも電話して、お母さんに『私、来週シンガポール行ってくるし。仕事で』」と自慢した。特集記事を6ページも書くのも、署名記事も、仕事で海外に行くというのもその時が初めてであり、とにかくうれしかった。

フリーの仕事は端から見ると、繁忙状況が分かりにくい。出掛けていても仕事とは限らないし、一日中家に居ても徹夜で原稿を書いている時期もある。ある時、親から仕事を手伝って欲しいと頼まれた。父親は工業用のブラシを作る町工場を経営している。人手が足りないから、暇なら週に何回か来て欲しいというのだ。しかし「私の本職はフリーライターであって、そっちをおろそかにしてまで行けないじゃないですか」。そのうち、結婚して家を出ていた姉が工場に勤めはじめ、仕事を手伝えとは言われなくなった。代わりに「自分でやっていくなら、営業もちゃんとしないといけないんじゃないの」とお尻を叩かれるようになったという。

フリーライターを続けていくには、得意分野を持つことが必要だと言われ、自分の周囲でもそういう話題がのぼることが多い。実際、自分も何かテーマを見つけなければと考えていた時期もあった。「確かに、やりたいことを見つけて一生懸命頑張る人のほうが夢は叶うと思うし、そのほうが絶対褒められる人生

やとは思う」。しかし「無理やり決めなあかんから決めてるって気がして。そんな無理に決めたところで何になるんやろ」と気づいた。与えられた仕事は常に楽しんでやってきた。今もブライダル以外の分野も書きたいとは思うけれど、かといって何か探そうという努力は特にしていない。挫折した経験がないからだろうか。思ったことは叶ってきたという安心感だろうか。つい楽なほうに逃げてしまう自分がいる。もちろん、将来に不安がないと言えば嘘になる。今は親元において、生活費をそれほど心配しないで済むという事情に甘えているのも分かっている。

働くこと自体は嫌いだと、Nさんは言い切る。「でも、お金はいるじゃないですか。そうなると、嫌なことをやってお金を稼ぐよりは、やって楽しいことをやってお金が貰えたら」と考えている。他に面白いと思える仕事があれば、ライターに執着はしないという。自分にとっては「結婚して、生活もあって。その中で自分らしさを残すために仕事する」という形が、理想的な働き方なのではないかと思っている。

(6)【事例6】 M・Oさん 29歳 滋賀県草津市在住 家族構成(父、母、本人、妹) 書道教室勤務(アルバイト)

今年(1998年)の6月、M・Oさんは、高校の時にアルバイトしていた惣菜屋の仕事を、1か月間だけ手伝った。オーナーの奥さんが体の具合を悪くしたので店を閉めるという話を聞き、どうしても、店の最後をきちんと見届けたくなったのだ。最終日にスタッフ全員で記念撮影をすると、なぜか自分の青春が終わった気がした。

Oさんは、写真の専門学校を中退してラーメン屋で働いた後、派遣社員として百貨店での電話交換手を3年間勤め、前述の惣菜屋、工場、食堂などでアルバイトをした後、現在は惣菜屋のオーナーの娘さんが経営する書道教室の仕事を手伝っている。

どこかの企業に正社員で入るとい道は考えなかったのか、という私の質問

に、彼女は「就職すると、そこで終わりのような気がして」と答えた。社員になるためには、一生そこに縛られて働くという覚悟が必要である。その前にまず自分がやりたいことを見つけ、見つかったらそれを仕事にできるところで働こう。やりたいことが見つかるまでは、ちゃんと就職も結婚もできないと考えていた。様々な職を転々としながら、自分でも分からないまま何かを探していた。本当はスピードを出すのが怖くてたまらないのに、無理にバイクに乗っていた時期もある。写真を学び、個展も2回開いた。自分の写真が新聞やテレビにも取り上げられ多くの人から反響を得たが、そこでも自信は持てなかった。

いくつもの下請け工場で働くうち、Oさんはさまざまな人に出会った。各地を転々とし「長野に恋人がいる」と真面目な顔をして触れ回る中年男性、ブラジルから出稼ぎにきた人たち。クーラーもない工場の中で、発泡スチロールの箱を積み上げていくパートタイムの中年女性たち。定年まで総務の仕事をしていたという、元サラリーマンの67歳の男性もいた。今までデスクワークをしていた人が、工場では自分の息子ほどの年齢の係長に頼まれ、重たい機械を動かすだけの仕事に文句ひとつ言わず取り組んでいる。今まで自分は、写真で作品を作ったりバイクに乗ったり、自分なりに一生懸命生きる意味を問い掛けてきたつもりだった。でも、彼らは恐らくはそんなことを考える余裕もなく、それぞれの事情を背負いながらも汗を流して、黙々と単純作業を繰り返している。その現実の前では、頭だけで考えただけの人生の意味など、何の説得力もないのだと実感した。

今年の春、昨年9月から派遣社員として働いていたガラス工場で、「よく頑張ってるし、正社員にならないか」と声を掛けられた。そこでの仕事は、カットされたガラスに傷がないかをチェックすることだった。チェックの結果に問題があると、本社から返品され再検査をしないといけない。返品があるたびに、自分のせいではないかと怯える。同僚に「ミスがあって当然ぐらいのつもりでええんやで」と言われても「失敗したらいけない」と神経質になる。肩の凝る、疲れる仕事だった。

この時、彼女は28歳になっていた。改めて、自分の周りを見渡してみると、主婦になって子育てをしている友人や、事務の仕事は何年も続けている人がいた。「友だちは、今まで真面目に仕事をした。一本の筋があって、それが自信につながって、幹が太くなった人間が横にいてる。でも、自分は個展をやって花が咲いたりしてるけど、幹が細いっていうのかな。そんな気がして」。今まで、自分はいずれ結婚するからと、仕事もきちんと向き合おうとはしないで斜めに構えていたのではないか。18歳の時から8年間付き合い合っていた男性に自分をどこかで預けてしまって、自分自身の将来像を何も描いてこなかった。しかし、今は付き合い合っている人もいない。これではいけない。初めてきちんと働こうと思った。朝起きて、仕事に行く場所があるということは幸せなことだ。毎日「働いた」という充実感を持って家に帰ることができる。自分の仕事ぶりを評価してくれる人がいる。彼女は、ここの工場で社員になって、根を張ろうと考え始めていた。

しかし、Oさんは迷った末、結局正社員になることを断って工場を辞めた。昔なじみの惣菜屋がなくなる前にどうしてもそこで働きたいと思う気持ちを大事にしたかったのだ。高校生の時に初めてここでアルバイトしてから、仕事や恋愛など何か行き詰まったときに自分を取り戻せるのは、いつもここだった。工場の社長には「この不況の中やし、将来のことを考えたら定職に就いたほうがいいから。よく考えて」と言われた。Oさんは言う。「正社員はボーナスはあるし、将来の保障もある。認めてくれたのはうれしかった。将来結婚しーひんでも、ここで嫌でもやっていかなって思ってたけど、なんか無理してんなって思ってた。肩は凝るし体もしんどい。ミスしたらいかんって気も張る。すごい迷ったんやけどね。でも、無理して正社員になるより、1か月しかあかんって分かってたけど、最後にもう1回、お惣菜屋さんで働きたいって思ったから」。迷っていた時に、中学校時代の友だちにこう言われた。「あんたは、夏はかき氷屋、冬はタコ焼き屋をするネーチャンなんやから、ガラスを見たりするなんて無理。合わへんことやったって続かへんで」。

惣菜屋では、畏まった言葉を使ったり、細かい作業をする必要もなく、ありのままの自分でいられるのが心地よかった。常連さんが訪れた時に「今日はこれがおいしいよ」、「おばあちゃんの具合はどう？」などと会話をするのが楽しい。商店街の中を自転車を走らせて店に着く。エプロンをつけ、三角巾を被り、「よし！」と気合を入れていく。床にモップをかけ、店の前を掃除する。店で起こる出来事、やることの一つ一つが好きだと思える。改めて、自分はそういう人と触れ合える仕事、自分を飾らずにお客さんと対面で話ができるような仕事がしたいのだと実感した。

将来的には商店街にあるお好み焼き屋などで働きたい。今まで、自分は「何か」を見つけようと頑張ってきたが、必ずしもやりたいことを決めてそれを仕事に結びつける必要はないのではないか。「一生この仕事をやり遂げるっていうんじゃないかって。いろんな問題が起こるのを解決していきながら、いろんな人と触れ合って仕事をするってこと」が働くことだと今は考えている。20代前半は形を求めすぎていたと彼女は言う。「平凡なんてないしふつうの暮らしなんて本当はないけど、朝起きて、ご飯を食べて、働きに行って。なんやかんやとありながらも暮らしていくっていうこと。『やりたいことを仕事で』って探してきたけど、そうじゃなくて実はすごく身近なことやったんかなって思う。毎日ふつうに暮らすことが一番やりたかったことじゃないかなって気づいた」。

3. 若干の理論的考察—相続者としての女性と主体的選択—

科学の専門主義に対して批判的な立場に立つライフヒストリーの研究方針では、研究者がむやみに専門用語をふりかざして語りの内容を分析することは、慎むべきことであるとされる。そうはいっても科学的に一言も言及しないわけにはいかないのだから、仕事の社会学的言説、ピエール・ブルデューの文化的再生産論、組織の経済学などを参考にしながら、事例の女性たちの語りの内容について、個々のケースには言及せずに、またできる限り専門用語を使わないで検討する。当初、本稿とライフヒストリーの方法論との関連について整理した論

述文を作成したけれども、紙幅の都合上、割愛することにした²⁾。

事例の女性たちは仕事、労働、職業についてそれぞれ自分の立場から語っている。それに対し、アダム・スミス、K. マルクス、M. ウェーバー、近代経済学者、フランスの現代思想家たちの言説、さらにプロテスタントの職業観や日本の仏教の労働観を引き合いに出して、女性たちの仕事観を考察することもできる。学問や宗教の理論的言説からは、労働価値説、「職業＝天職」「職業＝神の命令」「職業＝倫理的実践」「職業＝社会的義務」「職業＝自己実現の場」「職業＝生計の手段」といった考え方を導き出せるだろう。それらの重々しい職業観（仕事観・労働観）から見ると、事例の女性たちを含め現代人の職業意識はどうなっているのか。宗教的意味と倫理的意味は失われ、義務感や自己確認の感覚を核とする職業意識に変容している。事例の語りには表現されているように、微妙な個人差はあるにせよ、仕事を「いやなもの」「つまらないもの」「遊びよりは劣るもの」と断言するところまでは変容してはいない。むしろ、自己確認や自己実現の場である、ないしは社会とのつながりを実感できる場であるという意識が強く、仕事に積極的に関わろうとしている。ただ、男性とは違い、仕事に対する女性の積極的態度は、いろいろな障害に直面するように思われる。そこで次に、文化的再生産論と組織の経済学の視点から、女性の社会的状況と選択の問題について考えてみよう。

まず財産を相続するという、ありふれた出来事を手がかりにして、事例の女性たちが何を相続し、どのように現在の生活を築き上げているかを考えてみよう。学歴そのものは、医師や弁護士や美容師の資格とは異なり、職業選択に直接効力を持つわけではないけれども、高等教育を通じて得るものは決して少なくない。経済学関係の知識、英会話と英語の読み書きの技能、学校生活を通じて知り合った友人と知人、もっと漠然とした身体技法や多様なノウハウや態度など。それらの要素は、それぞれ特定の個人を焦点として適当に結合しながら、ダイナミックな構造的形態を形成し、ハビトゥス (habitus) と呼ばれるものになる。ハビトゥスの中でも最後に挙げたものは、暗黙知と呼べるような、言葉

では説明しきれない部分であり、本人にも自覚されていないことも多く、客観的にも測定しにくい。行動として現れ、効果を上げた時には、本人にも意識されるし他者からも認知される。学校以外の家庭生活を通じて得るものも、良いもの悪いものであれ少なくない。生まれてから意識されないまま、家庭生活を通じて体得したノウハウや身体技法や態度は、家庭外で体得された要素を組み込みながら、成人後の行動と生活を方向づけるようである。そこにおいて、ハビトゥスを基盤として、社会や文化による構造的拘束と当事者自身の主体的選択とがせめぎ合う。構造的拘束の力が優位になるか、それとも主体的選択がより強く現れるかは、その時々状況と当事者の個性—遺伝と学習の相互作用によって形成される固有なもの—によって左右されるだろう。

事例の女性たちの多くは、恵まれた環境の中で育ち、学校生活を終了しているので、多様な選択肢の中から自分の好みに合う方向を選ぶことが、許されていたように思われる。就職する時期が、たまたま運良く1990年前後のバブル全盛の好景気と重なったこともあるにせよ。(ブルデューのお得意の用語である)文化資本、社会関係資本、経済資本に恵まれた彼女たちは、文化資本の他に社会関係資本を頼りに選択することもできた。ただ、昔のように選択肢がほとんどなくて、生きるためには何でもしなければならないような限界状況とは異なり、選択肢が多いとどちらにするか迷うものである。インタビューのまとめからは、恵まれた女性たちの迷いが感じられる。一般に女性の場合には、どの程度自覚しているかどうかは差し置いて、選択する際に母親が「理想とすべきモデル—否定すべきモデル」となるケースが少なくない。事例の恵まれた女性たちは、母親に限らず父親や友人等の意見にも配慮しつつ、待遇面で男女差のないことと将来へのキャリアの展望を主な基準として、最終的には自分で決めようとしていたように見受けられる。

多少なりとも迷いながら選んだ職場に就職してからは、予想通りの職場で満足している者もいれば、予想と現実との落差の前で何かと不自由な思いをしている者もいる。法律のタテマエとは違い、性別役割分業の慣行が残っている職

場では、身につけたノウハウと潜在的能力を十分に生かすことができずに苦勞している。それぞれの企業には独自の組織文化（ルーチンや慣行など）、すなわち独自の企業特殊熟練（enterprise specific skills）が蓄積されており、入社してから一つ一つ習得していかなければならない。恐らく3年から5年位の時間をかけて、ようやく所属組織の文化と熟練に馴染むようになり、そこから各個人の潜在的能力が発揮されるようになるのではなかろうか。終身雇用や年功序列と呼ばれる日本の組織文化は、独自の企業特殊熟練を一つ一つ習得していく論理を組み込んだものであり、決して悪い制度ではない。批判されるべき慣行は、性別役割分業の遺風であり、有能な女性たちの勤勞意欲を失わせてしまいがちであり、あるいは転職を考えるように仕向けてしまう。男女差のない職場を選んだ事例の女性たちにも、多少そのような悪しき影響が現れている。また、事例の女性たちの専門職志向にも見られるように、先に挙げた医師や弁護士や公認会計士たちの資格は、関連する組織ならばどこでも受け入れ可能な専門的スキルとノウハウを証明するものであり、所属組織を転々と渡り歩いても支障がない。それに比べ、ふつうのサラリーマンの場合には所属組織を変えると、一から独自の企業特殊熟練を習得しなければならないから、損失を被りやすい。女性の場合には、さらに性別役割分業の慣行が加わり、いっそう損失が大きくなるだろう。

就職後、問題となる重要な分岐点は、「結婚せずに仕事を続けるか、結婚して仕事を辞めるか、結婚しても仕事を続けるか」である。結婚そのものに関しては、職業選択とは多少事情が異なるだろう。ブルデュー風に語ると、趣味の合う人を選ぶ際には熟慮してそうするものではなく、運命的に出会う形になり、大企業に就職した女性たちは、意図せずに自分の趣味に合う良きパートナーを身近なところで見つけてしまうだろう。ただし、そのような運命的な出会いとは別に、先ほどの分岐点は、事例の女性たちにとっても重い選択肢になっているようである。社会のいろいろな慣行と言説の他に、将来パートナーとなるかもしれない男性の態度、あるいは結婚後は夫の態度が、女性の選択に重大な影

響を及ぼすだろう。分岐点を前にして、両親や夫をはじめとする周囲の人間との複雑な関係の中で、事例の女性たちも揺れ動いているように読み取れる。社会学と経済学の特定の視点を援用して、インタビューの事例に関して若干の検討を試みたが、紙幅も尽きたので、もうこれ以上は続けられないことにする。読者の固有の視点から事例の中身を読んでもらいたい。

注

- 1) インタビュー（聞き取り）は、ライフストーリーとライフコースの理論、ないしは文化的再生産論と組織の経済学に基づいて設計された学術的調査ではないけれども、それらの視点から考察するだけの価値は十分であると判断し、資料の編集と分析を試みた。
- 2) 注の1でもお断りした通り本稿は、厳密なライフストーリー（生活史 life history）の方法論に基づいて調査設計され記述された研究ではないけれども、ライフストーリーの枠組みの趣旨にも合うように企画された調査に依拠する論述である。仕事、生活、家族などのテーマに即して現代のふつうの女性に対して聞き取りを実施し、テープに録音した記録を編集し考察したものであり、広い意味でのライフストーリーの社会学的研究に入るだろう。新しい方法論的見解を提示するつもりはないが、筆者たちが想定しているライフストーリーの研究方法を示すために既存の代表的定義を引用しておく。

「ライフストーリー（生活史）とは、個人の一生の記録、あるいは、個人の生活の過去から現在にいたる記録のことである。具体的には口述史、自伝、日記などがある。とくに最近では口述史の聞き取りが、ライフストーリー法のメジャーな方法となっている。口述史（オーラル・ヒストリー）とは、調査者の質問に応える対話形式で調査対象者の生まれてから今日までの歴史を語ってもらうものである。それをテープ・レコーダーで録音し、その録音テープの声を逐語的に文字化し、その逐語記録から重複や不要部分を削除して、あるいは順序を入れ換えるなどの編集を施して、『ライフストーリー』に仕上げるわけである。」（『ライフストーリーを学ぶ人のために』4ページ）

「個人史の場合、本人が自己の現実の人生を想起し述べているライフストーリーに、本人の内面からみた現実の主體的把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し、位置づけ、注記を添え、ライフストーリーに仕上げる。……ライフストーリーは、……個人史として社会史と交差しており、両者は互いに補強しあうことができ

る。それが可能な理由は、たとえどちらも物語性を示すとしても、架空の物語ではなく、共に本人・研究者双方にとって歴史的現実としての信憑性をそなえた歴史として再構成されたものだからである。」(『ライフストーリーの社会学』192-193ページ)

本稿がこれらの定義に正確に合致する方法に従っているかどうかは、微妙であるにしても、定義が語る趣旨なり発想なりに立脚していることは間違いない。重要なポイントは差し当たり次の三点である。第一に、聞き取りの固有の状況において聞き手の適切な態度と語り手の真摯な態度を基礎にして、聞き手と語り手とが協力する形で語り手のライフストーリーをつむぎ出す作業、第二に、録音された語り(ライフストーリー)を逐語的に文字化する作業、第三に、研究者やライターがそれぞれ独自の視点から近現代の社会史と照合しながら「文字化された語り」を編集しライフストーリーに仕上げる作業。本稿は、以上の三点に関してライフストーリー法の「許容範囲内」にあると考えられる。

主な参考文献

- ・ピエール・ブルデュー(今村仁司訳)『実践感覚1』(みすず書房、1988年)
- ・同(石井洋二郎訳)『ディスタンクシオンI・II』(藤原書店、1990年)
- ・宮島喬『文化的再生産の社会学—ブルデュー理論からの展開—』(藤原書店、1994年)
- ・ポール・ウィリス(熊沢誠他訳)『ハマータウンの野郎ども』(筑摩書房、1996年)
- ・落合恵美子『近代家族とフェミニズム』(劉草書房、1989年)
- ・江原由美子他『ジェンダーの社会学』(新曜社、1989年)
- ・今井賢一・伊丹敬之・小池和男『内部組織の経済学』(東洋経済新報社、1982年)
- ・S. ダウマ=H. シュルーター(岡田秀和他訳)『組織の経済学入門』(文眞堂、1994年)
- ・小池和男『日本企業の人材形成』(中公新書、1997年)
- ・奥村和子・桜井厚編『私たちのライフストーリー』(谷沢書房、1991年)
- ・中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』(弘文堂、1995年)
- ・谷富夫編『ライフストーリーを学ぶ人のために』(世界思想社、1996年)

Summary

Women's Works and Life Stories

—A Study of the Documents of Life

Hideo Komatsu, Mari Ako

In recent years a great number of the papers on gender studies and women's studies have been read at the conferences and conventions of the Japan Sociological Society. Taking the trend of these studies into consideration, in this paper, we examine the life stories of six young women according to the frames of references that are called life history method and cultural reproduction theory. Mari Ako has been studying on the subject of young women and work. She has carefully recorded their life stories on tape and drawn up a large number of documents of their life by making transcriptions from tape recording. In this paper we would like to take the life stories of six women of these documents. Ako reconstructs the life stories according to the aim of this paper. Komatsu attempts to interpret these life stories from the points of view what is called cultural reproduction theory and economic approaches to organizations. Women in home, school or local community acquire not only information, norms, value-orientations but also various skills. They choose or decide on their future course depending on those skills--what Pierre Bourdieu called cultural capitals that have been inherited. They obtain a position in a firm and acquire "enterprise specific skills" through OJT (on-the-job-training). But they are treated unequally because of sex.